

基本的な生活習慣を

どのようにして育てるか

千代田区立富士見幼稚園

I はじめに

夢をもつ子ども。未知の世界へあこがれをもっている子どもたちを、迎え入れる幼稚園。ここは子どもたちが形成する小さな社会である。幼稚園の門をくぐると、すぐに集団の生活がはじまる。動く、走る、ころぶ、泣く、笑う、さまざまな表情と音響の中に生活する子どもたち。瞬間、瞬間の場面がちょうど走馬燈のように、めまぐるしく展開されては消えて行く。

こういう中で、たのしさを味わう子どもと、打ち沈んでつまらなくなってしまう子どもがいる。

また自己活動ができなくて、棒立ちになっている子どもと、自己

中心をそのままに身勝手な行動をしたり、他を傷つけたり、横暴きわまる子どもなど、さまざまな性格と個性があらわれる。四月入園当初の状態は、ちょうどおもちゃ箱をひっくりかえしたような、足の踏み場もないという感じの生活がつづく

こういう色とりどりの子どもたちを、たのしく遊ばせ、それぞれにもっている個性のよさをよりよく育てながら、幼稚園という小さな社会に順応できる社会性を育てていかなければならない、ではどのようにして社会性を育てていったらよいのか。まず集団の中では、みんなとたのしく遊ぶことを経験させ、集団のよさの味わう心情を育てる。こうしてたのしい経験、うれしい感情によって、他の人が困るようなことや、いやがることはしないということを、

わからせていきたい。

次に、個人の生活が集団の中に適応できるように、基本的な習慣形成をする。人間生活に必要な基本的な習慣づけは、小さい時から生活の自然の流れに即して、むりなく、たのしみながら身につけさせたい。

そこで従来から幼稚園でとりあげられている基本的な生活習慣を、改めて検討してみたのである。それは、清潔、食事、排せつ、着脱衣など健康、衛生に関する面が主要項目となっている。これらは生活上ぜったいに欠くことのできない基本的な要素であるが、この上にさらにもう一步強くふみ出したいことは、個人の内面的な心情にふれ、いたわりや、助け合うなどの豊かな感情や感受性を育て、集団生活に適応する心の芽ばえをはぐくんでいく。これはやがて社会生活に、適応する望ましい態度となってあらわれるものであると考える。

自我欲求の強い幼児を導いて集団生活の中で、「ともによるこび合える」人間性を育てていきたいと、しみじみ思うのである。

II 個人生活の基本的習慣・態度の育成

個人生活の基本的習慣の形成をめざして、指導実践しながら感じたことは、いつの場合でも形式だけの指導は、子ども自身が教師の

計画線にのってこないばかりか、抵抗を感じて、はねかえしてしまふ。つまり身につかないということである。

教師は常に子どもと共にあり、その場その時の環境と子ども自身の状態をよくみきわめて、適当な処置と指導をすることである。そして子どもと教師の心が触れ合った時、信頼と親愛が深まり、よい指導がなされる。

このような考えで、指導実践した記録事例をもとにして、指導の方針をまとめてみた。

○ 生活の場をとらえて指導する

基本的な行動を身につけさせるためには、いっせいに指導することもあるが、その場その場の、いわゆる現場をとらえての指導のほうに、場に応じた指導ができる。つまり子どもに、じかに触れ合うことによって、その場の子どもの心をつかみ、心身の発達段階に即した処置と指導ができる。

△事例Ⅴ 「はなをかんでさっぱりする」

五月十四日 年少児 弘茂 はながつまって気もち悪そうに見えたので「弘茂ちゃん、はながつまって気もちがわるいんですよ、とってあげるからいらっしやい」と、職員室へ連れてきた。フーンといいながらとってやる。二、三枚の紙ではとりきれない

ほどたまっていた。私「気もちよくなつた？」弘茂「うん」といって出て行く、おべんどうの前に「またでた」と言ってきた、なるほどたまっている。私は前にしたとおりブーンといいながらとってやった、こんなに早くたまる状態だったら、きょうはじめてではなく前から気もちが悪かったにちがいない。なぜもつと早く気づかなかつたのだろう、と自分の目と神経をうたぐつたりした。彼は先生にしてもらえぬ安易さと、さっぱりしたい気もちで「またでた」とやってきたのであろう。

五月十五日 朝からなんとなく気ぜわしく、弘茂のことを忘れていた。いつの間にか弘茂が私のうしろにくつついている。はなをかんでもらおう、ときたのだと察した。私「きょうは自分でかんでみましょう」弘茂「かめないの」と困った表情。私「かめるかめる、先生がおしえてあげるわね」と、いいながら弘茂にポケットから紙を出させてまず手と紙でうけることをおしえる。ブーンと調子をつけてやると、音といっしょにたくさんはなが出た。ふきとるつもりで紙をまるめる。はなが口のまわりいっばいに広がる。私「はなが紙から逃げちゃったわね、こんどかむときは逃げないようにならなくとっちやいませうね」と、いいながら顔をきれいにふいてやる。彼は微笑しながら出て行く。

五月十六日 家でよくかんできたのだろうか、きょうはもうあまりたまっていないのに「せんせい」となつかしそくに近寄っ

てくる。私「弘茂ちゃん、きょうは、はながたまっていないわね」と弘茂の顔を見た。弘茂「うん、おうちでかんだの」私「そう、よかつたのね、たくさんたまらないうちにかむと、じょうずにかめるでしょう」弘茂「うん」私「はなをかんだ方がいい気もち？ かまない方がいい気もち？」そはで私たちの会話をきいていた賢司が「そりゃかんだ方がいいきもちだよね弘茂ちゃん、せんせい知らないのかなあ」と、いって得意そう。弘茂も私も賢司もいっしょに笑っておしまい。弘茂はまがりなりにも自分でかめるようになった。そしてはなをとったあとのこちよさを味わつたにちがいない。

○ 子どもの意志を尊重し、たのしんで経験させる

生活の場をとらえての指導と共に留意しなければならぬこと、教師の一方的なおしつけの指導であってはならないことである。子どもが意見をいおうとするような気配が感じられた場合などは、子どもの言い分をよくきいてやり、その意志も尊重しながら正しい方向に指導することがたいせつである。

交通道徳のような、ぜったいに守らなければならないことでも、むやみにおしつけるのではなく、視聴覚をとおして理解させる、などの配慮が必要である。理解し、納得してこそ、たのしんで実践されるものである。

△事例Ⅴ「ノックをしましょう」

四月二十五日 一年保育女児、ほとんど全員が用便にくる。

その場をとらえて私「はいっていますか、いたらおへんじしてください」と、いいながら三回たたく。

ゆり子「どうしてたたくの」

私「だまってあけたらわるいでしょ」

さき子「ごめんなさいって、いえは」

私「そうね、さき子ちゃんがいうように、あっ、悪かったと気がついたとき、ごめんなさいってあやまるのはいいことね、だけだね、急にあげられるとびっくりするからわるいでしょ」みんなわかったらしく「うーん」とうなずく。そこではいるたびにノックの実践をする。新しい経験なのでみんなよろこび、たのしんでノックする

よろこびすぎで、過剰にならないように配慮しなければならぬと思った。

「洋服がぬれることを気にして、手が洗えない」

九月十三日 一年保育男児数名がしごとのあと手洗いをした。

洋服や床がびしょびしょにぬれている。私「みんな手洗いがじょうずになりましたね、洋服や廊下をぬらさないように気を

つけるとなおいいのね」すると博和がこたえてくれた。「どうやればいいのかなあ」とくびをかしげる。私「博和ちゃんのように、どういふふうにするかは洋服たの廊下をぬらさないようにできるかを考えて手洗いのいい子ね」すると政二が洋服のぬれたことが気にかかる。政二「せんせい、洋服ぬれちゃった」とおろおろする。私「こんど洗うとき気をつければいいのよ」となぐさめたが政二はその次から洋服のぬれることだけが気がかりで手洗いをちゅうちょする。ちよつとしたことで手洗いに恐怖を感じてしまったのだ。

大ぜいの中のたったひとりの子どもでも、こうした不安を感じさせたり、行動意欲を減じさせたのは、大きな失敗であった。その後三、四回いっしょに手洗いをして実際指導をした。体の位置、水の出し方などをおしえて、すこし位は水がかかるのはかたがない。びしょびしょにならないように気をつけることをわからせたので、手洗い恐怖は全く解消した。

「便所をよごしたら、すぐ先生かおばさんにいう」

五月二日 一年保育きくぐみ、女児八、九人そろって用便

にくる。一ヶ所がよごれているので、誰もはいらない。この機会をとらえて「便所をよごしたら、すぐ先生かおばさんにいう」ことを話したところ 啓子「よごさないようにおちついてすればい

いのよ」

孝子「よごれたらきたないから、はいらなければ」

止江「よごれないところへ、はいればいいじゃない」

孝子「そうよね」と同意する。

先生やおばさんという、ということが納得できないらしい。私「啓子ちゃんが、考えたように、おちついてよごさないようにするのが一番いいことなの。でも、もしもいそいでして外へおしっこや、うんこがついたら」孝子「わあ、きもちがわるい」と口をさしはさむ。私はすぐことばじりをとって「きもちがわるいでしょう、だれでもそんなきたないところへはいるのはいやでしょう。（みんなうなずく）だからお友だちやみんなのために、先生かおばさんというのよ」孝子「なんていえばいいの」私「便所をよごしちゃったから、きれいにしておいてね、ってね、そうすればきれいにしてもらってみんなが気持ちよくはいれるでしょう」みんなうなずく。

「笑えないあいさつ」

五月七日 年少女児、みさこがひぎをすりむいて手当を受けに来た。手当がすんでかえりかけたみさこに「みさこちゃん、ごあいさつは？」と促してみた。みさこはちゃんと立ってベコンとおじぎをし、あらたまって「せんせいおはようございます」とい

った。私は汗顔の態だった。笑うにも笑えず「おはようございませう」と返した。

この日年長男児よしおがやはりひぎのすりきずの手当を受けた。治療がすんでかえりがけに「よしおちゃん、きずをなおしていたたいて、うれしいでしょう。ごあいさつしてかえりませうね」と促がした。よしおはにこにこしながら「せんせいさようなら」とことはを残して立ち去った。こうして私の求めには応じてもらえなかったが、ふと自分のいったことばに疑問を感じた。

「あいさつ」ということは、おはよう、さようなら、いってまいります、たたいまなどをあらわすのであって、「ありがとう」はお礼をいうことはで指導する方が具体的に理解できるように思われた。

おとなは、すべてあいさつにまとめてしまうが、こどもには通用しないことが、しばしばある。

○ 反復指導をする

習慣づけをするということになると、一回だけの指導では目的は達せられない。くりかえし、くりかえし行なう。つまり積みかさねがたいせつであるが、たのしんで実践できるよう、配慮を忘れてはならない。「また、いわれちゃった」とか「また、やるのか」と、いうようなけんお感をもたせないよう注意しなければならぬ。

「どうもうまくいかない排せつ後の手洗い！」

九月二十三日 食事の前の手洗には食べるといふ条件があり、遊んだあと、しごとのあととは汚れていることから割合平易に実行できるが、排せつ後の手洗いは実行しにくいらしい。便所という不潔感からそこにある水道まで不潔な感じがするのかわ、どうもうまくいかないのが、家庭へお願いすることにした。一対一で指導してもらいたい旨を通知によって依頼する。

九月二十七日 家庭の協力や指導はめざましいもので、排せつ後の手洗いが大分できるようになった。

十月十日 殆んどの子どもが実行できるようになった。なおつづけて習慣づけまでいきたい。

○ 何もかもいっぺんにやらない

このくらいのことではできずだとか、これだけはさせなくては、などと成長の段階を胸算用でできることは、つづしまなければならぬ。理解・技術すべてに個人差があることも忘れてはならない。子どものひとり、ひとりをよく知り、能力に応じた指導をすることである。たとえば手を洗うことについても、はじめは洗うという行動、次の機会には指先まで洗う。次の段階では水の出し方、周囲に水を散らさないように、というように反復しながら前進して

行く。ことに年少児の指導にあたっては、発達や指導の段階を考えて、何もかもいっぺんにやらせようとしない。また、ことばだけで指導するのではなく教師自身も共に実行しなければならないと痛感した。

或る日、手洗いの場でよろこんでいる子どもの姿を見た。

子1「あたし、せんせいと洗っちゃった」とうれしそうに友だちにはなしをしている年少女児、そのことばを受けて 子2「僕だってせんせいといっしょに洗ったんだから」と負けじと得意がる年少男児。いかにも先生に洗ってもらったかのような錯覚を起すらしい。先生はただ手洗いの仲間にはいっておなじ列にならんだだけなのに「せんせいも洗った」「せんせいといっしょに洗った」というよろこびとうれしさがプラスされて、実践の意欲をもりたてていく。教師はこれらの行動を習慣づけ、さらに高めていくためには、寸時も休止してはいられない。

○ 方針は一貫性をもつ

指導の方針はそのつど変わってはならない。指導技術の面では、その場そのときの状態で変わることもあろうが、方針そのものは常に一貫していなければならない。これを食前の手洗いに例をとってみる。他の組は食事が終わりそうなのに、ごつごう主義的教師の組はまだしたくもできていない。あわてた教師が「きょうはあまり手

がよごれなかったから洗わないでいい。早くおべんどうのしたくをして。よその組はもう終っちゃうのよ。さあ早くはやく」とせきたてる。へやの中が急にざわめき出す。子どもが走りだす。手洗い場まで行って洗わずにひき返す。どの子どもどの子もおなじような動き方をする。教師の指示にすなおにしたがったとはいえ、これでは困る。子どもはとまどい、手を洗う習慣づけがくずれざるばかりでなく、安定感を失ない教師は信頼されなくなる。

「おとなはなぜ、あいさつしないの」

十月四日 二年保育年長男児、のりがこんなことを言ってきた。「せんせいおとなはなぜあいさつしないの」私「なぜって、どうして」のりお「ぼくね、よそのおばさんに道であつたときね、いつもおはようっていうんだけどおばさんたら知らんかおしていつっちゃうんですよ、つまんないよぼく。おとなって変だなあ」私「そう、それはおばさんが気がつかなかったんでしょう」「ちがいます、ちゃんとぼくのことみていたって言わないんですよ」私「それはおとなが、うっかりしているわね、よくおはなししておきましょう」といった。

のりおはこの頃、目立って明るくなり、意見や意志をはっきりいう。自信をもって行動するし、また活動することのたのしさを味わっている。いわば今が一番たいせつな時期であるにもかかわ

らず、世の母親はこの善意を受けとめてくれない不満をぶちまけている。

「子どもの感謝の気持ちを受けとめない母親」

六月十二日 一年保育女児、まさえときみこが手当をうけに来た。私「まさえちゃんも、きみこちゃんもうちでもおかあさんにありがとうっていえませんか」まさえ「いいの、うちではね、おかあさんにありがとうっていったらね、おかあさん笑ってんの、そしてね、おかあさんはうちの人だからありがとうっていわなくていいっていったのよ」手当をしながらこんな話をする。うちでのようす、母親の態度がうかがわれる。

早速懇談会に話す「親はてれないでよく受けとめてください」

○ 教師は心をぶつつける

活動のできない子、粗暴な子、知能のおくれている子、こういふさまざまな子どもに対して、教師はそのひとり、ひとりにま心をぶつつけていきたい。指導する場合、処理しなければならぬとき、いつもその子どもの立場になって考えてやりたい。不満気なぶつつ口の中で言う子どもがいる。このようなとき「なにをぶつつ言ってるの、はっきりいいなさい」などと、おとなはすぐ言う。はっきり言えないからぶつつ言っているのであろう。そんなとき子ど

もは何を求めているのか察してやらなければならない。

話をきいてもらいたいのか

何かをおしえてもらいたいのか

なぐさめてもらいたいのか

抱いてもらいたいのか

まだほかにいろいろあると思うが、子どもの心を早く汲みとるひらめきがなくてはならないと思う。教師は子どもにま心をふっつけて指導し、善処することによって信頼が深まり親愛感が交流するのであると思う。

「目にはいった砂をとりながら……」

九月十七日 年少女児、春江が「目に砂がはいった」といって泣いてきた。私「どうしたの」春江「だれかがわたしの目に砂をいれたの」その誰かはわからない。果してどういうふうにはいったのかもわからない。春江はその誰かをうらんで、ぶつぶつこぼしている。砂はかなりはいっている。痛いにちがいない。私は目を洗ってやり、目薬をさしながらこんな話をしてみた。「春江ちゃん目に砂がはいって痛かったでしょう。先生もね、小さいとき幼稚園でおともだちと遊んでいて、急に目の中に砂がはいったの。誰がしたのかよくわからなかったけど、痛くていたくて泣きながら先生に砂をとっていただいたの。ちょうど春江ちゃんとお

んなじね。先生にとっていたたいとってもうれしくなっちゃってね。先生ありがとっていっちゃったのよ」話がおわって、私「春江ちゃんの砂もきれいにとれましたよ、さあむこうへ行ってみなさい」とおくる。春江むきかえて「せんせいありがと」といってへやの方へとんで行った。

「友だちの話が、終わるのを待つ」

十月八日 年少男児、明男と私とホリビルターのひこうきのことで話をしていた。明男は話を続ける「そしてね、世界の海をとびこえるんだよ、すてきでしょう」自分がつくった、今持っている今遊んでいるひこうきに夢をたくしている。なんとすばらしいことよ、と思いつながら話の相手をつとめていた、明男との話が一分三十秒位だったかな、隆がそばで、もじもじしている。明男との話が終わったとたん隆はかたずをのんで話し出す。「ぼくの飛行機だって遠いところまでとべるから海へなんかおちないよ」話はそれだけ、話が終わったらまた明男といっしょに遊びつづける。

同時に話をしない。他の人の話が終わってから話す態度がみられる。こんな場合ことばではほめない。隆の話をしみじみと聞いてやることで、他人をさしおいて出しゃばらなくとも、自分の話を聞いてもらえる、という安定感をもたせることが必要であると

思う。いつもいつも口でほめることだけが教育ではない。心と心とが通じ合えてこそ小さい芽を育てることができる。

○ 生活しやすく、安全な環境をととのえる

基本的な生活習慣のはじめにとりあげられるものの中に所持品のしまつがある。自分のものをしまつすることは、社会への適応性につながるたいせつなことである。これを身につけさせるためには、実践し易いように環境を整備してやらなければならない。くつ棚、帽子かけ、傘立て、くれよん、はさみ入れ場など、いずれも出し入れに容易な場所と、高さなども考慮し、その上各自の整理場所を定め、名まえまたはそれにかわる目じるしをつける。帽子のかけ場所が隣にあることだけでも、となりどうしという関係から友だちに關心をもつ動機となることがある。ただしちゃんと、よしあきちゃんが入園してはじめて顔合わせした間柄である、帽子かけがとりもつ縁で、どちらからともなく近づきあい交わりはじめた。各自の整理場所をきめておくことはたいせつなことである。

公共の場としての手洗い、うがいの流し場、便所などは常に清潔にしておくように心がける。また遊具・玩具も多からず少なからず整え、ゆずり合ったり、きまりを守ったりしてのしくあそべるように配慮する。それらは常によくしらべ、危険のないように注意することは特に心がけなければならない。

物的環境と共に、たいせつなことは、子どもを受けとめる教師のあたたかい愛情と、園内に流れるなごやかなふんい気であることを忘れてはならない。

「年少児ひとりひとりに帽子のかけ方をおしえる」

四月二十二日 靴のしまつができて、帽子をかけたきた年少児のひとりひとりにかげごむ紐をかけるように指導する。ごむ紐がかたい、輪が小さい、指先がうまく動かないなどで、なかなかかけられない。やっとかけられたのが½位、あとは先生にかけてもらう。(みて覚える)中にはあご紐をかけたものもいたが、きょうはそのままにした。

四月二十四日 ごむ紐がかたいためまだひとりでかけられない子が多い。しかしきょうはいっしょうけんめいになってかける。さえこ「せんせい、かけられないの」という。自分でかけようと努力する姿、このことに取り組んでいるようすがうかがわれる。

「所持品のしまつについて、母親に話をする」

五月十七日 PTA総会のあと、「身のまわりのしまつについて」の話をすること。最初の段階として帽子のかけ方について、知ってもらいたいこと、親の態度などを話し、理解すると共

に協力してもらいたいことを頼む。

・帽子はかけごむ紐を帽子かけにかける

・ときどき紐をしらべてやる

・かける場所をきめて、かけやすくしてやる——帽子だけでなくかばんも同時に

・なお、子ども自身としては、紐がとれたことに気づき年上の者に言えるようにしたい

とつけ加える。

「母親の協力で、帽子のしまつがよくなるようになった」

五月二十日 二年保育年長児は昨年から黄帽子を使用しているの、かけ方については特に指導はしなかったようである。年少児のかけようとする努力にくらべて平易なんの気もなくあご紐をかける。あご紐が重みでのびて帽子がぶらさがったかっこうになる。ところが、きょうは各組九十%、きちんとかけてある。

十七日のはなしをよく理解してくれた母親の協力が速刻効を奏したといえる。正しい処理のし方、ひと目みてもころよい。これはおとなだけの感覚ではない。こどもの心にも整頓感が映じるところであろう。

「せんせい、こんなにげんきになったよ」

十月八日 年少男児 哲夫が急に発熱したので、家人の迎えを頼んだ。

十月十一日 哲夫が職員室へはいってきた。哲夫は元気で私にこういつてくれた。「せんせい、ぼくもうこんなに元気になったよ」その表情は明るく、よろこびと感謝の気持があらわれているように思えた。私は「そう、よかったわね」と一言だけいった。あとで受持教師の配慮であったことを知ったが、これこそ心の底をゆさぶる真の心情教育であるように見えた。受持教師にこのこまやかさがなかったら、子どもは人と人とのつながりを経験することなく過ごしてしまう。こういう教師は芽ばえを育てるといふよりむしろ種子をおろしてやることで、人間として育って行くのである。自分だけがよければいいのではない。心配してくれた人に感謝をし、共によるこび合える心の持主でありたい。私は教師の配慮による子どもの姿をみてほのぼのとした。

